



第40回 日産 童話と絵本のグランプリ

# さいごのお月見 さや ちはこ

ぼんぼん山は秋色にいろどられ、白  
いスキが風にそよいでいます。

きょうは十五夜。

里の風習で「お月見ください」「お月  
見どろぼうです」といつて、こどもた  
ちが家々をまわりお月見のお供え物の  
お団子や、おかしをもらいあるきます。

ひとりぐらしのふくばあちゃんは、  
この里でお月見をするのは、今年でさ  
いごになります。とおくの町に、ひっ  
こすことになったからです。

「今年はおおいそがしね。たくさんお  
団子を作らなきやね」

よいこらせつと、ふくばあちゃんは、  
お団子づくりにとりかかります。

ゆでた小豆にさとうをいれて、あん  
こをつくります。小豆をここと煮な  
がら、お団子をつくります。団子粉に  
湯をいれて、ねって、丸めていきます。  
そして丸めたお団子をゆでて、水にさ  
らして、うちわであおいで、かわかし  
ます。

「やつと、できたわ」

ふくばあちゃんはほつとして、お団子  
の味見をします。

今年でさいごなの。娘に三つ子の赤ち  
やんが、うまれたの」

こどもたちはびつくりした顔で、ふく  
ばあちゃんを見上げました。

「三つ子って、三人いつしよにうまれた、  
赤ちゃんのことなの。三人の赤ちゃん  
のおせわは、とてもたいへんなので、  
ばあちゃんは赤ちゃんたちと、町でく  
らすことになったの。もう、みんなに  
あえないけど、げんきでね」

こどもたちの目が、みるみるなみだ  
でうるんでいきました。

「この里をはなれるのは、ばあちゃん  
もさびしいけれど、赤ちゃんが生まれ  
るのは、とてもおめでたいことなの。  
赤ちゃんのおせわはたいへんだけど、  
とてもしあわせなことなの。ばあちゃ  
んも、げんきでがんばるから、みんなも  
げんきですごしてね」

こどもたちは、なみだをうででふくと、  
ぺこんとおじぎをしました。

かえっていくこどもたちのすがたを  
みおくりながら、ふくばあちゃんは、  
さびしくなりました。

「ここのお月見は、ほんとにきょうで、

「うん。もつちり、もちもち、おいしいわ。  
つぎは、きなこね」

きなこにさとうをいれて、ませます。  
お団子にそえる、あんこときなこもで  
きました。

ふくばあちゃんは味見して、うれし  
そうに、うなずきました。

「あんこもきなこもじょうできね。み  
んなに、おいしいお団子を作らせるわ」

縁側にスキをかぎり、お団子にあ  
んこときなこをそえて、お月さまにお  
供えしました。里のこどもたちに、お  
団子をわたすじゅんびも、できました。

空がほんのりすみれ色にそまるころ、  
こどもたちが、つきつきとやつてきま  
した。

「お月見ください。お月見どろぼう  
です」

「はあーい」

ふくばあちゃんは、戸をあけました。  
いつも見る顔、はじめて見る顔の子も  
います。こどもたちの袋には、もうた  
くさんのお供え物が、つまっています。  
「お月見どろぼうさんたち、どうぞ」

さいごなのね」

空を見上げると、真上におおきな、  
きれいなお月さまがかんで見えます。

「さあ、これから、いそがしいまいにち  
がはじまるわ。げんきをだして、ここ  
でのさいごのお月見を、たのしみましょ  
う」

ふくばあちゃんは家にはいると、縁  
側でお月さまをながめながら、お団子  
を食べました。里での生活が、色々お  
もいだされます。

かなしかつたおもいでは、ちいさくなっ  
て、たのしいおもいでばかりが、ふく  
ばあちゃんをつつんでいきます。ふく  
ばあちゃんは、とてもさびしくなっ  
てきました。

その時です。

「ごめんください」  
声かして、そとにでてみると、羽織は  
かま姿の男の人が、かしこまった顔で  
立っていました。

「自分は、ぼんぼん山の村長でござい  
ます。こどもたちが、今までたいへん、  
おせわになりました」

村長さんが、うやうやしく、頭をさげ

ふくばあちゃんは、こどもたちに、お  
団子をわたしていきます。

「ありがとうございます」  
みんなは、にぎやかにかえつていきま  
した。

「あとはあの子どもたちだけね。あの子た  
ちは、いつもおそくにくるものね」  
ふくばあちゃんは家に入ると、晩ごは  
んをたべました。そして、おそくに  
くるこどもたちを、まちました。

夜空が紺色にそまるころ、外からか  
わいい声か、きこえてきました。

「お月見くださいーい」  
「はーい」

ふくばあちゃんが外にでると、小さな  
こどもたちが、6人かたまって、立っ  
ていました。

「お月見どろぼうさんたち、いらつしや  
い。どうぞおとりくださいな」

ふくばあちゃんは、いつもより、うん  
と多いお団子を、こどもたちに、わた  
していききました。それから今年はとく  
べつに、おかしをわたしました。ふく  
ばあちゃんは、みんなを見ていました。  
「ばあちゃんは、ここでのお月見は、

ました。  
「お礼に、今宵はぼんぼん山で、お月見をもらっていただきたく、参上いたしました」  
村長さんは後ろをふりかえると、手の平でさしました。

「夜道なのであれに」  
見ると、時代劇で見る駕籠がひとつ、そばにふたり、駕籠かきが立っています。

「まあ」  
ふくばあちゃんは、とてもおどろきましたが、村長さんの心づかいを、うけることにしました。

「では、お月見をいただきます」  
ふくばあちゃんはおじぎをして、駕籠にのりこみました。  
駕籠はほいさかさつさと、ずんずん山をのぼっていきます。

ついたその場所は、銀色のススキが広がるぼんぼん山の、ススキの原でした。  
「まあ、なんてすてきー」  
濃紺の広い夜空に、大きな大きなお月さまが、白く、美しく輝いています。  
「お月見、もらってくださいーい」

6人の子どもたちが、かけよってきました。

「みんな、ありがとうね」  
ふくばあちゃんはにこにここと、みんなのせなかをだきました。それからおじぎをして、いきました。

「では、お月見をいただきます」  
「では、お月見をどうぞ」

「お月見をどうぞよ」  
子どもたちが、くるりつと宙返りをしました。と、ぼんつ、と6匹の子だぬきたちが、あらわれました。

「おほほっ」  
ふくばあちゃんは、ちゃんとわかっていたのです。

子どもたちの出した手に、肉球があったり、顔にひげがでていたり、うしろ姿のおしりから、しつぽがでている子が、いたんですもの。村長さんも駕籠かきも、待ちかねたように宙返り。みんな、たぬぎの姿にもどりました。  
「さあさ、お月見じゃ、お月見じゃ」  
「お祝いだ、お祝いだ」  
「赤ちゃんが生まれた、お祝いだ」  
おとなのたぬきが、山ぶどうや柿やり

んごを、はこんできました。子だぬきたちも、つたいます。いろんな木の実や栗、くるみなど、山の幸がたくさん。あら。ふくばあちゃんのお団子も、おかしもあります。

子だぬきもおとなのたぬきも、みんないっしょに腹鼓をうちます。

ぼこぼこぼこぼこ ぼこぼこぼんー。  
ぼこぼこぼんぼん ぼんぼこぼんー。  
ぼんぼこぼんぼこ ぼんぼこりんー。

ふくばあちゃんも、手拍子をうちます。うたいます。みんなでおどります。きようはとくべつに、よふかしです。里でのさいごのお月見です。

楽しげな腹鼓の音とわらい声、十五夜のススキの原に、いつまでもきこえていました。

## さや ちはこ

主婦 大阪府

### 受賞のことば

日本の田舎に、小さなハロウィンのような風習がある事を知って、書いたお話です。思いもかけず素晴らしい賞を頂き、驚いています。本人以上に喜んでくれる家族や友人がいて、それとても嬉しいです。のんびり歩いていた私は、大きくあつたかく背中を押されました。新しいお話を沢山書いていきたいと思っています。有り難うございました。

### 審査員コメント

十五夜の晩、子どもらが“お月見どろぼう”と称して家々をめぐり、お団子やお菓子をねだるといふ、ふくばあちゃんの里の風習がいきいきと描かれていて、情景が目には浮かびます。結末は意外性を欠くものの、丁寧な文章と素直な作風には好感が持てました。

富安 陽子